伯州上灘村の傳説

峯地光重著

特249
313
2

0054706000

0054706-000

特２４９－３１３

伯州上灘村の伝説

峯地光重・著

峯地光重

昭和４

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

特249
313

伯州

上灘村の傳說

峯地光重著

昭和四
三・六・一
水戸市

岩阿彌陀の話……（一）
足跡さま……（三）
金の鶏……（五）
大六橋……（七）
胡麻姫……（九）
米で馬を洗つた話……（一一）
龜姫……（一三）
土手の草と神樣……（一五）

岩阿彌陀の話

田内の岩阿彌陀さまに、皆さんは參つたことがありますか。あの何丈もある高い岩の上に、阿彌陀樣が刻まれてありませう。あの阿彌陀樣に水をかけて、落ちて來る水の滴をいただけば、どんな病氣にも、御利益があるといふことです。だから昔からこの阿彌陀樣には、方々からお參りをする人があるのです。

さてこの阿彌陀樣にはおもしろいお話があります。

むかし村に亂暴な若者がありました。

「なあに、皆が阿彌陀樣阿彌陀樣といつて、かついでゐるけれども、あれは自然に出來たものさ、それを拜んでゐるなど、お目出度い人もあればあるものだ。」

と若者はいつもそんなことを云つて嘲つてゐました。

或る日、この亂暴な若者は、この阿彌陀樣にのみにかけて、岩ごとはぎとつてしまひました。阿彌陀樣は岩のかけらになつて、その高い崖の上から、下に流れてゐる川の中に落ちこんでおしまひになりました。男は痛快なことをしたと思つてかへつたのであります。

あくる日、男は剝ぎとつた跡を見に行きました。すると不思議なことには、鋏いでしまつた筈の

阿彌陀様の姿が、前の通りあざやかにあらはれてゐます。さすがの亂暴者もこれには全く魂消てしまつたのであります。

實はこの像は、昔、巨勢金岡といふ有名な畫師が、この岩の下を舟で通つたとき、あまりよい岩があるので、舟をとゞめて畫いたのださうです。

このことを男はあとで聞いて、岩の底までも徹つてゐる金岡の筆の力に驚き、さうして自分の無謀な振舞を悔んだといふことです。

河の中に落ちこんだ阿彌陀様の像は流れ流れて、こゝから何十里もはなれた隱岐島についてゐました。島の或る寺の住持が、或る日海邊を歩いてゐますと、海の底から異様な光が輝いてゐます。見るとそれは缺けた阿彌陀様の像です。

「これは勿体ない、これは勿体ない。」

さういつて住持はすぐさま自分のお寺にもつてかへつて、叮重に祭つたのでした。

「それにしても、一たいこの阿彌陀様はどこから流れて來られたのか？」と住持は不思議に思ひました。

「わしのゐたところが知りたくば、紙に南無阿彌陀佛と書いて海へ流して見よ。」

或る夜、夢に阿彌陀様があらはれて、さうおつしやいました。住持はその夢のおさとしの通りに、

紙に南無阿彌陀佛と大書して、海の上に流しました。すると紙はまるで生きてゞもゐるかのやうに、ずん〳〵沖へ流れて出ました。住持はその後をつけて舟を出しました。

かうして紙は流れ流れてとう〳〵この岩阿彌陀様の下についたのであります。僧は崖の上をふり仰ぐと、そこには自分のひろつた阿彌陀様と寸分ちがはない像が岩の上に畫かれてゐます。

「たしかにこゝの阿彌陀様がいらしつたにちがひない。」

僧はそこでこの紙をひろひ上げて、南無阿彌陀佛の文字を岩の上に刻みつけ、その前で供養をしてかへつたといひます。

その文字が今もあざやかに殘つてゐるのを皆さんは見るでせう。

足跡さま

辨慶岩——

それ、あの竹田川の眞ん中に、大きな岩があつて、よくその岩の上で釣をしてゐるのを見るでせう。——あの岩を皆さんは知つてゐますか。

あの岩は、昔は三朝街道の崖の上にあつたのです。それが落ちて今は川の中にあるのです。この

岩がまだ山の上にあつた頃のお話です。皆さんが讀本などでお馴染の辨慶がこの地に來たのです。たくさんの武士が、ひとりの辨慶を攻めて、この山の上に追ひ上げたのでした。しかし辨慶はこれ等の木の素武者に、おめ〳〵敗けをとるやうな男ではありませんでした。で、追ひ上げられたやうな風を見せて、この山の上にあがつたのでした。そしてこの雜兵たちの度肝をぬいてやらうと思ひました。

辨慶は追ひ上げられて、この山の上の大岩に薙刀をついて立つたのであります。そして、

「ウーン」

といふ掛聲をかけたと思ふと、辨慶の身体はもう宙にありました。薙刀を丁度風を切る擂のやうにして、空高く飛び上つたのであります。追つかけた雜兵たちがあつけにとられてゐるのを尻目にかけて、辨慶は身を鳥のやうに翻して、三町もある向岸の岩にとびうつつて、すつくと仁王のやうに立つたのであります。

武士たちは今まで爭つてゐたのも忘れて、この辨慶の離れ業をやんやとほめはやしたのでありました。

辨慶がうんと力んで、飛び上つたとき、大きな足跡が岩の上についてしまひました。それでそれからこの岩を辨慶岩とよぶやうになりました。

又、向岸にとびうつつて足を踏張つたとき、大きな足跡が岩の上につきました。その足跡は今も

殘つてゐて、村の人は「足跡さま」といつて、辨慶を喜つて居ます。

辨慶岩は、その後明治二十六年頃、山の上からころげ落ちたのでした。川の中に辨慶岩がおちると、あまり大きな岩なものですから、川の瀬がこの岩のためにかはつて、これまで大原の方へ大水がついてゐたのが、それ以後川はおとなしく眞直ぐに流れるやうになつたといひます。今はこの岩のあたり一たいが深い淵となつて、魚がたくさん集まるので、この岩の上には常に釣する人があつまるのです。

金の鷄

下田中は古い村です。

下田中の勝宿禰神社は、おほかた千百年もたつた古い社です。この神社とともにこの村もあつたと見なければならないのですから、下田中は隨分古い村だと考へられますね。

さてこの下田中の村から、倉吉にいく道の右側に、一本のハネリの木の生えた饅頭形の小山があるでせう。この小山の中には金の雞がうづもれてゐると傳へられてゐます。

昔、この村にあるお金持がありました。そのお金持がまだまづしかつた時のことです。節季にな

ると、いつも借錢乞ひがこの家につきまとつてゐました。あまりうるさいものですから、主人は借錢乞ひを避けて、町にかくれてゐたのでした。

「もう、おそくなつたから掛取も來る筈はあるまい。」

と主人はさう思ひました。そこでこつそり町を出て、この驛道にさしかゝつたのであります。もう眞夜中すぎて丑三つ時でありました。すると何處からか、

「こけこつこう、福をやらう。」

と雞の聲がかすかにひゞいて來ました。主人は夢ではないかと思ひました。すると、やがて又、

「こけこつこう、福をやらう。」

とつゞいて聞えて來ます。いかにも冴々とした聲でありますっ主人は不思議なこともあればあるものだと思ひました。自づと身のひきしまつて來るのを覺えました。

「こけこつこう、福をやらう。」

聲は三度聞えて來ました。たしかにハネリの木の下からです。やがて黃金のすれ合ふ音がちやら〳〵と聞えて來ました。主人は、

「これは有難い吉兆だ。もう今は元日だし、今年は乾度まわり合せがいゝに違ひない。」

と喜び勇んで歸つてすぐ惠方拜をいたしました。

果してその年は廻り合せがよくて、ぐん〳〵お金が溜つていきました。そして次の年もその次年も、仕合せのみうち續いて、この家は遂には大へんなお金持になりました。

それからこのことを聞きつけて、村の人が、

「この山を掘つたら、乾度寶物がたくさん出るにちがひない。」

といつて、この山を掘りかけたことがあります。すると不思議なことには、このハネリの木がゆら〳〵搖れてうなりだしたといふことです。又その後この小山に手をつけて、お腹の大へん痛んだ人もあるといふことです。

それで今も尙誰もこの小山に手をつける人がなく、田の中にこゝだけは小山として取殘されてゐるのであります。

大六橋

大六といふ大力持の男がこの村にゐました。大六といふ名を聞いたゞけでも、恐しく大きな男であつたらうと思はれますね。

大六はお角力さんでありました。あちこち歩き廻つては相手のお角力さんを投げまくつてゐたといふことです。

この大六さんが或日、ひよつこり村にかへつて來ました。

その時、村の人達は大勢で道普請をやつてゐました。そして米田に通ずる往來に石橋を架けやうとして、大石にたかつて、その石を運ばうとしてゐました。しかし、何分大きな石ですから、仲々運べません。村の人達はこの石にあぐんでゐるところでした。

「お前さん達、今日は何してゐるんだ。」

山のやうな大男の大六が、不意にそこにもどつて來て、さういひました。

「いや、今日は道普請で、橋をかけようとしてゐるところだ。よいところに歸つておくれだつた。お手傳をしておくんなさい。」

と、みんなは云ひました。

「さうかい、どうれ、わしが一つ力んで見るだ。そこどいてくれ。」

大六はさう云つて大きな石に手をかけました。大六がうーんと力むと、大きな石はむつくり起き上つて來ました。

「いや、これなら手傳も糞もあつたものぢやない。わし一人で大丈夫だ。」

さう云つたと思ふと、大六は輕々とその大石を背負つてゐました。

長さ八尺、幅四尺ばかりの大石がまるでひとりで歩いていくやうです。

「どこに架けるのだ。」

大石を背負つた大六が云ひました。

「こゝ、こゝだ。」

と村庄屋さんが指圖をしました。

大六はパタンとその大石を川の上に倒してしまひました。倒すと立派に石橋は出來上つてしまひました。

今もその石橋が駄經寺に殘つて、大六橋と呼ばれて居ます。そしてこの橋を中心にして上大六、下大六の地名がのこつてゐます。

胡麻姫

三明寺に山名寺といふお寺のあることを知つてゐませう。

今から六百年程前に、この地に山名時氏といふ大將が、因幡伯耆の國守としてお城を構へて居たのです。城の本丸は今の上秀にあり、二の丸が佛石山にあつたといひます。山名寺はその山名氏の菩提所であつたのです。三明寺は山名寺の名をとつて村の名としたにちがひありません。

山名豐氏は時氏十代の孫でありました。この頃山名氏の勢力は次第に衰へてゐました。その時尼

子經久が攻入つてまゐりました。そして豊氏は戦に敗れ、因幡の鳴瀧村まで落ち延びたが、この地の長田肥前のために討たれたのです。

豊氏の娘に胡麻姫といふのがありました。館に亂入した敵兵の隙をねらつて、三明寺の民家にのがれたのであります。

頃は丁度、八月半ばの暮方で、家ではかまどに火を入れて夕餉の支度をして居りました。その時姫は敵兵に追はれて、あはたゞしく家の中に駈け込みました。

「どうかお助け下さいまし。」

姫は息せきつて申しました。家人は姫の様子で萬事をさとつてゐました。

「早くこちらにお上りなさい。」

家人は手早く姫を奥の間に導いて、大きな櫃の中に隠しました。そしてそ知らぬ風をして火をたいてゐました。

やがて敵兵は姫を追つかけて來ました。

「館から女がひとりこちらに逃げて來た筈だが。」

と一人の武士が怒鳴りました。

「いゝえ、何方もこゝへはいらつしやいませんでしたが。」

家人はそしらぬ風をして申しました。

「でも、たしかにこゝに逃げこんだ筈だ。かくして居るだらう。」

敵兵はつか〳〵家の中にはいりこみました。丁度家の中は焚火の煙で濛々とくすぶつて居ました。實は家人がわざとくすめてゐたのです。

「ひどくくすもつてゐるんだな、これはたまらぬ。」

武士どもはさういつてどや〳〵と出ていつてしまひました。

かうして胡麻姫は危い命を助けられたのであります。

その後胡麻姫はこの家に養はれて成人しました。そして後にはこの村に嫁せられたといひます。

この村で駒井の姓を名のるものは、この胡麻姫の子孫であるといひます。

胡麻姫のお墓は今は倉吉大岳院にあり、毎年八月十五日の放生會には、お墓參りをして、青松葉をくすべて、當時の姫の危難を偲び、叮重な供養をするのであります。

米で馬を洗つた話

「田内の城は高い山の上にあるのだから、長圍の計で攻めたら、城は水に困つてわけなく落ちるに

ちがひない。」

寄手の大將はかういつて城を遠巻にして圍んでしまひました。遠巻されたまゝのお城はいかめしく朝日夕日に照り映えて、城の中はしんとしてゐました。

そして戰は何日たつても、変へられませんでした。

寄手の大將は、もう城の中の武士は、飢えてばた〳〵倒れてしまつてゐるに違ひないと思ひました。そして今夜は打入つて城を乘り取らうと思ひました。

やがて夕方になりました。靜まりかへつたお城の上に思ひがけもなく不意に馬があらはれ出て來ました。そしてその馬には武士がついてゐて、水をかけ水をかけして、その馬を洗ひ初めたのであります。寄手の大將は、その樣子を見て、

「城の上にはまだ水がたくさんあると見える、これではいくら攻めても駄目だ。」

といつてどう〳〵圍をといて去つてしまひました。

水のやうに見えたのは、實は水ではなく、白いお米であつたのです。大豐にお米を入れてゐて、そのお米で馬を洗つて見せたのでした。

白いお米が夕日に照り輝いて、本當の水のやうに光つたのでありました。

龜姫

彌生三日の空はなごやかに晴れてゐました。

山名伊豆守は、見日町四丁目の沖合に船をださせて、漁夫たちに網を曳かせてゐました。今日は山名伊豆守の舟遊びの日であります。手繰る網の上る毎に美しい鱗が閃めき、船の中では武士や姫君達の喜びのさんざめきが湧いてゐました。

網が手繰られていく中に、水の底から、黑いものがふはりと表れて來ました。

「おや大きな龜が……」と漁夫が叫びました。

「どれ〳〵」

伊豆守ものり出して眺め入りました。なるほど甲羅の徑一尺ばかりもある大龜が網にかゝつてゐます。

「これは珍らしい。」

伊豆守は殊の外のお機嫌でありました。

夕方になると、たくさんの獲物は漁夫たちの手によつて、伊豆守の館に運ばれました。やがて夜の酒宴が初まるのです。

伊豆守に龜姫といふ十五歳の姫様がありました。龜のかゝつたのをむつゝりとして見ていらつしやいました。この龜がやがて酒宴のお肴になるのだとお考へになると、大層かはいさうに思はれました。又自分の名前の龜がさうした運命に會ふことを見ては、どうしても暗い心にならずには居られませんでした。

館に歸つてから、姫は父上に龜をゆるしていただくやう願つてみようと決心なさいました。龜姫は父上伊豆守の前にしとやかに進み出て、事のわけを話して、

「どうか父上様、是非あの龜をゆるしてやつて下さいまし。」とお願ひになりました。

伊豆守は可愛き姫の申條なれば、成程そおうなづきになり、その夜、龜は海の中に放たれたのでありました。

この月の十一日には又舟遊びがありました。龜姫も又舟遊びにいらつしやいました。すると、不意に海の底から一匹の龜があらはれて、姫の舟べりにその首をのせかけました。姫は、

「この間ゆるして貰つてやつた龜にちがひない。そのまゝにして置きませう。」

と申されました。

しかし龜は姫をなつかしむやうに終日この舟につきまとつて居ました。

その夕方姫が館にかへられますと、不思議や、姫は身重になつて居られました。

やがて姫はお產をなさいました。生れたのは三匹の龜の子でありました。

伊豆守は殊の外お怒りになり、

「かゝることはまことに人倫の義ではない。姫は一刻も館におく事はならぬ。早く島流しにせよ。」

と家來にお言付になりました。姫の介添は池田兼千代といふ人が承りました。そしてとう〳〵姫は見日沖の小島に流されておしまひになりました。

又三匹の龜は壺に入れ、小舟にのせて、海へ流してしまひました。その舟は淀江の西の海岸の小山についたといひます。その小山を今は壺龜山といつてゐます。

土手の草と神様

土手には青草がのびてゐました。何日もつゞく大雨に草はだらりと葉をたれて、雨にさいなまれてゐました。

竹田川の水は刻々にふえて、土手の八分通りまで水はついてゐました。

「このぢきならとても土手があぶない。」

村人達はどんなに心配したか知れません。しかし、雨はちつとも小降りにはならないで、水は益々かさんでいくばかりでありました。そしてその日も暮れていつたのであります。

土手が切れてしまふと、この土手下の民家は一ぺんに押し流されてしまはねばならないのです。

土手が危くなると村人は鎮守の社で祈念するのが常でありました。この日も雨をついて村人はこの社に集つて祈念したのであります。夕闇の鎮守の森から太鼓の音がしめつぽく響き初めました。すると、宵すぎから雨は少し小降りになりました。

「おかげがあらはれたのだ。」

村人は雨戸をあけて、夜の空を仰いでよろこんだのでした。

しかし夜中になつて雨は又勢をもり返して來ました。雨に夢を破られた村人が雨戸をあけて見ますと、何といふひどい雨でせう。雨垂は瀧のやうにおちて、庭一めんは池のやうになつてゐるのです。

と、不意に土手の上が明るくなつて來ました。土手の上に赤い火の玉が泳いでゐます。そしてよく見るとその後から白衣の人が土手の草を踏んで歩いていきます。

白衣の人が歩いて行くにしたがつて土手の草はまるで生きてゞもゐるかのやうに起き上つて火の光にゆらめきます。

白衣の人は何回も土手の上を往き歸りして何か念じてゐました。

その中に火の玉はすうと鎮守の森へ入りました。そして白衣の人の姿もいつか見えなくなつてしまひました。

「いまのは慥かに鎮守の神様にちがひない。」

さういつて話し合つてゐる中に、雨は物忘れでもしたやうにやんでしまひ、わづかに小粒の雨がはら〳〵と雨の名殘をとゞめてゐました。

翌る日は空がすつかり晴れ上りました。風はそよ〳〵吹いてゐました。

土手の青草は、洪水に助かつたことを、あだかも喜ぶやうに頭をふり、手をあげて、青い空をのぞんで躍つてゐました。

◇上藤村傳說について

「岩阿彌陀の話」は何人にも聞いてまとめて書いたものです。話してくれる人が何れも一部分しか知つてゐませんでした。この話は滅びいく過渡期にあつたものでせう。「足跡樣」は隣村西鄕村の鉢慶岩の由來をしらべてゐる中に聞きあてたもので、三朝村某氏に聞いて書いたのです。かうした面白い傳說をもつ自然物はいつまでも保存したい。「金の鶏」に類した話は三明寺の岩屋にも殘つてゐます。こゝでは下田中のものを書きました。「大六橋」は字地名を研究しゐる中に見つけだしたものです。地名と傳說とは相當關係のあるものらしい。「胡麻姫」の話は松岡布政氏著「伯耆民談記」によつたものです。「米で馬を洗つた話」は見ばらしのきく高い土地と歷史とがくつついて生んだ傳說でせう。「亀姫」は船越豐清氏所藏同家記錄によつたものです。「土手の草と神樣」は、勝宿爾神社に關係したもの。同社の本殿の木彫に、河中を神樣が舟をもつて渡られるところがあるが、これは、この傳說と何かの意味で關係があるでせう。一たいにこの村の傳說には信仰的なものが多い。「足跡樣」は昔は足の惡い人が信仰したものださうですが、今はその信仰も滅びてしまつてゐる。

319
292

昭和四年二月十日印刷
昭和四年二月十五日發行

定價貳拾錢

著作兼發行者　峯地光重
鳥取縣東伯郡上中山村
大字八重二百八十七番地

印刷者　林實
鳥取縣東伯郡倉吉町
大字苅鋤町四一六番地

印刷所　合資會社東伯印刷所
鳥取縣東伯郡倉吉町
大字魚町二五四五番地
電話三一六番